

— 大腿骨頸部・転子部骨折の術後早期患者の傾向 —

渡邊光太¹⁾ 齋藤仁志郎¹⁾ 串田敬行²⁾ 前砂貴宏³⁾

1) 清智会記念病院 理学療法士

2) 清智会記念病院 作業療法士

3) 株式会社フロンティア

専門相談員/福祉住環境コーディネーター2級

【はじめに】

日本は長寿国であると同時に寝たきりの割合が非常に多いという特徴がある。骨折・骨粗鬆症は寝たきりとなる原因の第2位であり、当院入院患者においても転倒により大腿骨頸部・転子部骨折を受傷した症例は少なくない。又、リハビリテーション対象患者の多くの割合を占めている。

術後症例は立位下での健側下肢への重心偏移がみられ、立位動作・歩行動作において患側下肢への荷重量減少が問題となる事が多い。術後早期は車椅子が主な移動手段となり、その座位姿勢において重心がどのように変化しているか検証することにより、立位動作・歩行動作へのアプローチの手掛かりとなると考える。

【対象】

大腿骨頸部・転子部骨折の術後患者で、全荷重開始1週間以内の症例

【測定方法】

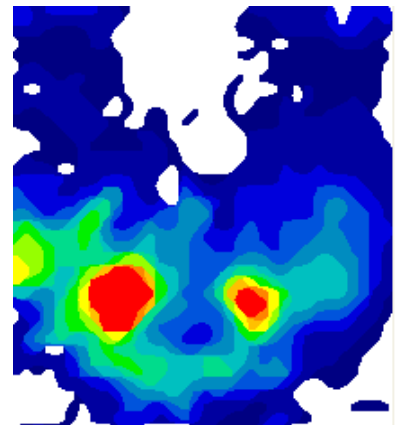
各症例において、普通型車椅子(写真①)乗車時とモジュラー型車椅子(写真②)シーティング施行時の座圧分布測定を圧力分散測定器(NITTA センサーシート)を用いて行った。車椅子乗車後、対象者に「正面を向いて真っ直ぐ座って下さい」と口頭指示を行った後、測定した。



写真①



写真②



右大腿骨頸部骨折術後症例

当日はその測定結果と傾向について検証した内容を報告する。